

武藤禎夫編

嘶本大系

第九卷

東京堂出版刊

編者略歴

大正十五年、東京に生まれる。東京
大学国史学科卒業。朝日新聞社出版
局勤務。出版校閲部次長、日本古典
全書編集長を歴任。編著に『江戸小
咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の
比較研究』（東京堂出版）『昨日は今
日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本
小咄集成』（共編、筑摩書房）『軽口
咄本集』（古典文庫）など。

漸本大系 第九巻 定価七八〇〇円

昭和五四年 一月二〇日 初版印刷
昭和五四年 一月三〇日 初版発行

編 者 武 藤 禎 夫
発行者 岩 出 貞 夫
印刷所 理想社印刷所
製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三十七(〒100)
電話 東京 三三―三六 一 振替 東京 三三六

凡 例

嘶本大系の第一期八冊は、江戸時代初期から明和年間までの前期嘶本の主要作品を紹介したが、ひきつづき、第九巻以降は、明和九年正月刊『鹿の子餅』以下の後期嘶本、所謂江戸小咄本を中心にした諸作品を翻刻するものである。第九巻は安永篇のⅠとして、明和九年と安永二年に爆発的に出版された主要作品十八種を収めた。いずれも江戸小咄の粹といえる佳作であり、後代の嘶本や落語に与えた影響も大きい優秀作なので、すでに活字化されたものばかりだが、網羅的に採録した。

まず、書名と刊・序年、作・序者名、画家名、板元、書型、底本の所蔵文庫（架蔵本は省略）などを記した。この場合、書名は、内題・序題・題簽などによって記し、刊記のないものは序の年月を示した。江戸以外の板元は地名を付し、相板のときは「○○等板」とした。また、原本の体裁を知るため、本文巻頭をカットで示した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものにするよう努力した。その方針は、概ね次の通りである。

1 本文の行移り・丁移りは、底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りにあたる所に、版心の丁付により、丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば、一丁の表と裏は（一オ）（一ウ）で示し、挿絵がつづく場合は（二ウ）（二オ挿絵）、（二オ）（一ウー二オ挿絵）などとした。底本に丁付を欠くときは、洋数字で実丁数を記

した。

2 句読点は、底本にとらわれず、私見によって句読点・並列点を施した。

3 小文字や割り書きは、人名とか評語、ト書きその他、意味のある場合のみ再現し、他は本文に組みこんだ。歌句は、改行して、理解の便を図った場合もある。

4 仮名について

イ 仮名の字体は、現行の平仮名・片仮名に統一した。「リ」「り」、「ヤ」「や」、「ツ」「つ」などは判別しにくいため、概ね平仮名にした。また「江」「子」は「え」「ね・ネ」とした。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は読み易さを考え、そのまま残した。小文字の送り仮名は、概ね大きくした。

ロ 特殊な合字・連字は、現行の字体に改めた。(例、ノ↓シテ、ま↓さま)

ハ 仮名遣いは混乱しているが、底本通りとし、歴史的仮名遣いには改めなかった。

ニ 本文の清濁は、底本では、当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。(例、おとがし↓おどかし、こどく↓ごとく)

ホ 誤字・誤刻と思われる仮名も改めず、行間に(ママ)(○○カ)と注記した。

ヘ 衍字と考えられるものも削らず、(ママ)(○○衍)と注記した。

ト 振り仮名も底本の通りとし、削除したり補わなかった。「限り」などの衍字もそのままとし、「空」などとした。ただし、位置のずれは正した。(例、奈良↓奈良)

5 漢字について

イ 字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を使った。ただし、固有名詞などで底本のままにした場合もある。

ロ 異体字は、できる限り、新字体または通行の旧字体に改めた。(例、奈↓松、幸↓喜、逮↓逮、菴↓庵、袁↓

煮)しかし、該当する字のない場合(例、姥、泪、姫)は、そのまま残した。

ハ 宛字及び通行の久しい文字は、注記せずに残した。(例、百姓―百姓、有時―或時、陳所―陣所)ただし、極端なものは(ママ)とか、正しい字を()内に注記した。

ニ 特殊な草体・略体は、通行の文字に改めた。(例、ひ↓候、へ↓也、れ↓被、あ↓給、ア↓部、井↓菩薩、厂↓雁、广↓摩・磨)

ホ 誤字・誤刻と思われるものはそのままとし、注記を施した。

6 反復記号は、底本にしたがい、「ヽ」、「、」、「ゞ」、「／」の四種を使用した。

7 挿絵はすべて収録した。その位置は、該当する咄の中か、近い場所に挿入し、原本での丁数も明記した。後人のいたずら書きなどは消したが、他は修整を加えなかった。なお、挿絵やカット用の本文巻頭写真で、原本には匡郭のないものもあるが、体裁上、枠で囲った。

8 序文中の印や、奥付・刊記などは、できる限り、原形を示した。

9 底本の虫損・汚損などで判読できぬ箇所は、同一板本で補えた場合は特に注記をせず、推定しうる場合は(〇〇カ)と注記し、全く不詳のものは、空白のままにした。

10 題名のない場合は、一行空きとして仮題は付さなかった。全篇無題の書は、検索の便を考え、各話の冒頭にそれぞれ洋数字で、通し番号を付した。

11 謡の詞章に付したゴマ点や、特殊な囲みなどは削除した。文中の特別な図柄は、凸版で示した。本巻所収の『説話仕形断』の類は、一部を文中に組みこむか、絵入りの丁を全部挿絵同様示すかした。この場合、なるべく原本に即した該当個所に凸版で示したが、通常の組み方ができず、一部は半丁全部を出すか、挿入個所をずらした場合もある。その際は「」に原図の位置を記した。

12 諸本などで話の異同出入のため特記を要するものは、補遺の形で、巻末の「所収書目解題」中に付加した場

合がある。

- 13 嘶本に多く見られる嗣足改題再板本は、出来る限り元板を紹介した。元板の全部を再板本が所収する場合などは、改題再板本の方を採り上げたこともある。両者の関連は、大凡解題で触れたが、主要なものは、第十九卷末の「嗣足改題本」の項に一括して収めた。

- 14 第十六卷までは刊行の年代順に収録し、絵入りや特殊な嘶本を第十七卷以降に特集した。

- 15 各卷末に「所収書目解題」を付した。そこでは、簡単な書誌と、諸本の異同や嗣足改題再板本との関連などを略記するにとどめた。

- 16 できる限り完本の紹介を心がけたが、一部が落丁や汚損で不備なものも、未翻刻で内容のよいものは、あえて所収した場合もある。

底本に使用した原本は、主として公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものであるが、一部は架蔵本も用いた。完本を求め得ず、二、三の本を併せ用いた場合もあるが、その一々は記さなかった。

第九巻で、原本の閲覧と公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して深く謝意を表する。

国立国会図書館・都立中央図書館加賀文庫・東京大学国語研究室・大東急記念文庫

嘶本大系 第一期全八卷

(既刊)

*第一卷 寒川入道筆記 戲言養氣集 昨日は

今日の物語 わらいくさ 百物語 *第七卷

私可多咄

*第二卷 醒睡笑 理屈物語

*第三卷 一休咄 一休閑東咄 狂歌咄 かな

めいし 竹斎はなし 一休諸国物語

*第四卷 秋の夜の友 囃物語 杉楊子 新竹 *第八卷

齋 籠耳 二休咄 諸国落首咄

*第五卷 字喜蔵主古今咄揃 当世軽口咄揃

当世手打笑 当世口まね笑 野鹿 武左

衛門口伝咄 鹿の巻筆 正直咄大鑑

当世はなしの本

*第六卷 枝珊瑚珠 露がはなし 遊小僧 初

音草嘶大鑑 露新軽口はなし 露の

五郎兵衛新はなし 軽口御前男 軽

口ひやう金房

軽口あられ酒 露休置土産 軽口星

鉄炮 軽口福蔵主 軽口出宝台 軽

口はなしとり 軽口機嫌袋 座狂は

なし 咲顔福の門 軽口独機嫌 軽口

蓬萊山 水打花 軽口もらいゑくぼ

軽口初売買 軽口福おかし 軽口春

ふくろ 軽口耳過宝 軽口わかえび

す 軽口臍順礼 軽口瓢金苗 軽口

笑布袋 軽口浮瓢箆 軽口腹太鼓

軽口福德利 軽口豊年遊 口合恵宝

袋 軽口東方朔 軽口扇の的 軽口

はるの山 軽口片頬笑

平均三二〇頁

定価 各巻六八〇〇円

目次

凡例 三

鹿の子餅（明和九年正月刊）……………三

楽牽頭（明和九年九月序）……………三

軽口大黒柱（安永二年正月刊）……………四

聞上手（安永二年正月序）……………五

飛談語（安永二年正月刊）……………七

坐笑産（安永二年正月序）……………九

口拍子（安永二年正月跋）……………二

今歳咄（安永二年正月序）……………三

聞上手二篇（安永二年三月序）……………五

聞上手三篇（安永二年閏三月序）……………六

近目貫（安永二年閏三月序）……………八

御伽噺（安永二年閏三月序）……………七

千里の翅（安永二年閏三月序）……………三八

再成餅（安永二年四月刊）……………二四〇

都鄙談語三篇（安永二年四月刊）……………二五七

芳野山（安永二年四月序）……………二六九

出頼題（安永二年夏序）……………二七六

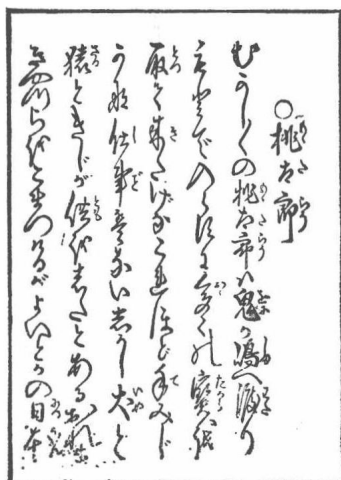
仕形噺（安永二年五月頃刊）……………二九〇

所収書目解題 三五

嘶 本 大 系

第九卷
（安永篇Ⅰ）

稿話
鹿の子餅かこもち
〔序題〕



稿話
鹿の子餅かこもち

序

山の手を飛歩行尻やけ猿、下町にすむ腹つぶくれ、いつれ
かおとし（序1オ）はなしをせざりける。こゝにその落を拾
ひあつめたる帖あり。話の稿なれば、わかうの響あるを
もて、鹿の子餅と題す。意味深長の（序1ウ）旨味は、ひと
つ／＼読て御らんなされ。数ハ六百八ほどありと云云

明和壬辰の

太郎月

山風



（序2オ）

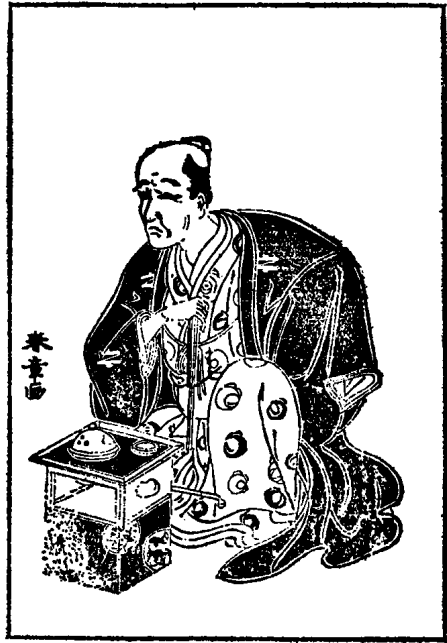
明和九年正月刊

木室卯雲作

勝川春章画

鱗形屋孫兵衛板

小本一冊



寒書

(序2ウ)

○桃太郎

むかし／＼の桃太郎ハ、鬼か嶋へ渡り、もとで入らずに多くの宝を取て来たげな。これほど手みじかな仕事はない。しかし、犬と猿ときじが供をしたとある。おれもきやつらをこまつけるがよいと、かの日本(二オ)一の秬団子をこしらへ、腰につけて行く。向ふの岩ばなに猿が出て居る。まづしてやつたりとうれしく、件の団子ぶらつかせ行過るを、猿よびかけ、おまへ、どこへござる。へおれか。おれハ鬼がしまへ、たからを取りにゆく。へ腰につけたハ何で(二ウ)ござる。へ是は日本一のきびだんど。猿、うかぬ只にて、へこいつ、うまくないやつだ

○牛と馬

惣たい、けだものゝ中で、爪の割れた物は道か早い。犀などゝいふやつ、爪かわれて居るによつて、波をはしる(二オ)こと、飛んだこつた。へハテナ。しかし馬ハ爪がわれてなければ、道が早い。あれハどうした物だ。へあれハ爪が割て居ぬから、まだ人が乗られる。あれが爪がわれて見やれ。不断飛ぶやうて、中／＼人が乗られる物でハない

へ牛ハどうした物だ。あいつハ爪がわれてゐれど、道がお
そいハ。(二ウ)あれか。あれは爪が割て居るから、道をあ
るく。あいつが爪がわれぬと、だいなし、うごくこつちや
ない

○煙艸入

古代の裂にて、たばこ入を数くこしらへ、味噌を上る者
あり。望で見れば、いかにもおもしろきき(三オ)あり。

まづ此にしきハ、いかふけつかうなきれそうにござります。
これハいつ頃のきれでござります。へそれハ実盛にしき
のひたゝれのきれさ。へいかさま、そふもござりませう。
又この蝶のちらく見へますは。へそれこそ曾我の五郎が
はん切のきれでござる。へして又、こゝに(三ウ)白地のき
れに赤い所のミへまするハ。へそりや、うし若の大口のき
れ。そのあかい所は、いがきのもやうのきれたのでござる
へ扱よくおあつめなされました。どうして、こふはあつま
りました。へみんな人形屋で貰て来しました

○鞠(四オ)

まりにはまつた息子へ、親父、遠廻しの異見。いかな事聞

入れねば、ある時よびつけ油をとりて、九損一徳、何のや
くにたゝぬ芸、向後ふつつりやむべし。鞠があれバ蹴た
なる。そのまり、うつちやつて仕廻へといふに、むすこ、
しほくと鞠を出し、手代をよひ、今まで(四ウ)もてあそ
んだ此まり、無下にすつるもあんまりじや。せめて庭の隅
をはつてうめ、しるしに柳をうへてくりや

○俄道心

相店の八兵衛、欠落して行衛しれず。程少し過て、両ごく
橋の上で、ひたと出つくわした所、ごつそり刺た道心(五
オ)すがた。でもゆるさず、胸ぐらひとつとらへ、コリヤハ
兵衛。坊主に成たとて、りやうけんはならぬ。いつぞやの
八百のかし、たつた今かへせ。へこれ、坊主に成たと思つ
て安くするな。かう成ても、心まで坊主にやならない

○盗人(五ウ)

ぬす人の用心に、親父蔵に寐る。それでもぬす人来て、家
尻をきり、まつ吾人蔵の内へ入れば、外の一人は、持出す
道具うけとる手はずで、しやがんでゐたり。時におやぢ、
目をさまし、壁に穴の明たるは合点ゆかずと、件の穴より、

あたまでさし出したるに、外に居るぬす人、へム、やくわん（六オ）から先きか

○挑灯

夜ばなしの婦ミち／＼、家来と咄しながらもどれバ、家来も咄しが尽て、もし旦那。此てうちんには、なぞくさりをつけた物でござります。へそれはひよつと、りふじんものが切た時、きれはなれぬ用心じや（六ウ）へシテ、そのときハだれがもちます

○浪人

雨のふる日は真の浪人と来て、晴間まつ張肘の門口。おあまり貰が立て、おあまり下さいませう。浪人、くすミ返つて、へあまらぬ

○馬鹿娘（七オ）

なんば馬鹿でも十七なれば、もふ袖をとめてやつたがよいと袖つめた日、近所のわかいしゆ来て、こりやおむす。袖とめ、めでたい。とりや見たいといへば、むすめ、右の手をあぐる。コリヤどふもいへぬといふ時、娘、左リの手を

あげ、こつちやも

○薨（七ウ）

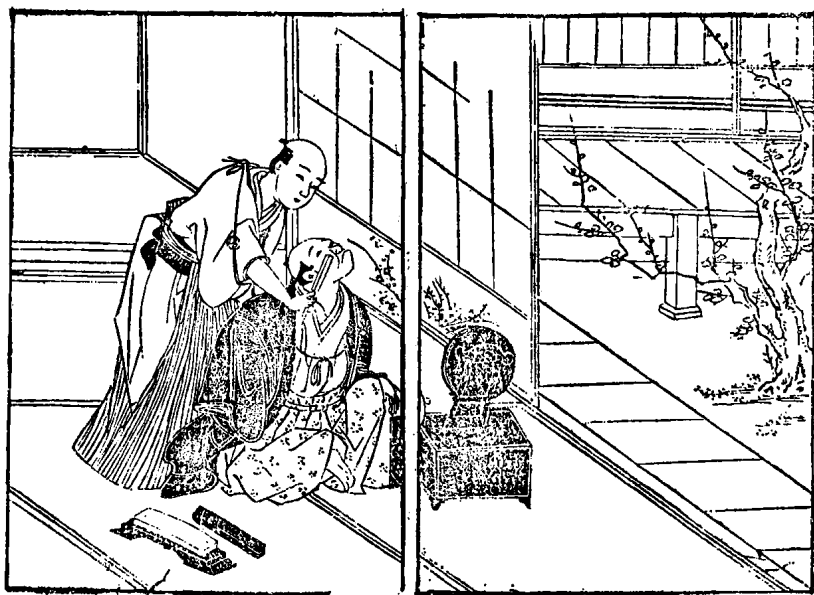
朝とく起て、やうじ遣ひながら、垣の透間から隣を覗けば、寐ミだれすがたの娘、ゑんがわにこしかけ、あさかほの花をながめて居る。これはかわゆらしいと、息もせずのそき居たるに、庭におり、留りに咲た一りんをちぎり、手のひらへおせて見る風情、どふも（八オ）いへず。哥でも案ずるよと、いよ／＼ゆかしく見て居たるに、今度は葉をひとつちぎりたり。何にするぞと見て居たりや、チント鼻をかんて捨てた

○鼻捻

殿の御好ミで出来た鼻ねじり、御預け被遊たにより、かんぶくろをこしらへ、（八ウ）これに入て御次の間にかけた所、白ふて見とむなければ、御鼻ねじりと書付たが、御鼻ねじりてへ、旦那の鼻をねちるやうなれば、書直して、鼻御ねじり

○鵜

うづら好せ給ふお大名、承つたへ聞に（九オ）まいる者



(十ウー十一オ)

へへ、御料理なと被下、甚悦ませ給ふよし。お出入の宗匠衆を頼ミ、私もきつい鶉好きと申入て、曉起し行た所、さすがお大名の御手の廻つた事、朝つはらからいろ／＼のむまごと、酒たらふく下され、のミくらひして居る内、チ、ツクワイトの一声。肝をつぶして、あれハ何でござります(九ウ)

○御髭

御大名、御髭を剃らせ給ふ時分、お舌でお鼻の下や御頬べたをふくらませ給ふ。なんと、おれが髭を剃る時、したをまいてはたらかせ、ふくらませるで、剃よくハないかとの御意。ヘイヤハヤ、格別仕りやう御座ります へ其筈。是ハおれか工夫じや(十オ) (十ウー十一オ挿給)

○劍術指南所

諸流劍術指南所と、筆太なかんばん。人物くさき侍来て、何流なりとも、わたくし相応の流儀、御指南下され。御門弟に成りましたいの口上。へ其元様ハ表の看板を見て、お出でござりますか へ左様でござります へハテ、埒もない。あれハぬす人の(十一ウ)用心でござります